

報 告

現代社会における人間性回復

宮 本 昇 (高千穂商科大学)

Noboru MIYAMOTO (Takachiho College of Commerce)

本報告は日本応用心理学会主催、昭和53年度公開シンポジウムとして、昭和53年6月3日、慶応義塾大学三田校舎で標記のテーマで開かれたものを、司会を務めた筆者が当日の録音をもとに要約したものである。

当日の発言は、「企業における人間性回復」と題して、人間と教育開発センター理事長・産業交流分析協会副会長 久米勝氏 (会員)、「学校における人間性回復」と題して、杉並区立第九小学校校長 宇多富久子氏、「家庭における人間性回復」と題して、酒田短期大学教授・東京家庭裁判所調停委員 北原歌子氏 (会員)、「地域における人間性回復」と題して、経営コンサルタント 石津元氏 (運営委員) に、すなわち、日頃、実践の場において活躍の4人の先生がたにお願いをした。

はじめに、太田垣事務局長から、このシンポジウムを開くに至った経過の説明を含めてのご挨拶があり、それにひきつづいて、司会者から、このシンポジウムを開く今日的な意義について愚見を述べさせていただいた。そして、4人の先生がたを参会者にご紹介申しあげ、本題にはいっていった。

まず、久米氏は、昭和46年のドル・ショック、48年のオイル・ショックのため、経済の成長が急に止まってしまったが、人びとの考え方がモノ中心から人間を優位に考えるようになってきたことは、たいへん喜ばしいことだと述べられた。そして、このような人間性の回復をさらに促進させていくためには、テーラーの科学的管理法、ホーソン実験を足場とする人間関係論、また、それらが人間性・組織性において十分ではないとして、さらにこれを発展させた行動科学など、一連の産業における人間観の変遷を十分に吟味しなければならない。それから、企業における人間行動の目標として、第一に社会的使命とその責任の自覚、ならびにそれらの達成の喜び、第二に企業生命を永遠に維持していくための、合理的な思考とその実践、さらに第三として、科学的研究を前提とする人間尊重の考え方とその実践がある。この三つの柱はどれもたいへん大切だが、なかでも第三の人間尊

重は、お題的な理念のレベルに止まらず、具体的・実践的な立場において展開していくことが、どの企業でも最も苦心をしているところだと説かれた。

そしてさらに、氏は、ご自分の終戦後における企業の人事・教育の仕事に従事された体験を語られ、その結論として、わが国企業における人間理解の姿勢が、ながい間、自分という人間をさしおいて相手の人間を理解しようとする、いわゆる他者理解能力の育成にだけ重点をおく、きわめて短絡的な考え方に支配されていたと反省され、真の人間理解とは自らを知ることでであると指摘された。ところで、自分を知る方法としては、東洋にも以前から禅とか内観法とか森田療法などいろいろあるが、産業はひとつには効率をきわめて重視するために、このような「行」で入る体験学習では成果が個々人によって異なること、また、全体的にその期待するものが直ちに成果としてあらわれにくいことなど、多くの点で問題がある。その点、TA (交流分析) は、内容が構造化されており、効果が期待される。すなわち、TA は心身医学という立場から、広く人を知る方法として、人間の生き方の根本にかかわりをもってきたが、これを「行入」に対する「理入」の一つのアプローチとして、改めて考えてみてはどうだろうかと言言された。

つぎに宇多氏は、小学校長という立場から、ご自身が自覚されている責任を表明なさるとともに、人間尊重の心に徹して、日本人としての自覚をたかめ、国際社会に貢献できる、自主的で健康な、明るく強い、考える子供を育てていくことをめざしている。そしてそのためには、先生方の協力をえて、①子供たちが生命の尊厳を知り、自分の総力を伸ばそうとするとともに、他人のために最大の奉仕をすることを教える学校、②子供たちが人間になる、豊かな真の教育創造に努める学校、③子供た

ちにすばらしい人生のスタートを与える学校、④閑にして静かな環境にとりかこまれ、子供たちがゆとりをもって自らをかいりみることができる学校、⑥地域の社会に開かれた学校、をつくっていかねばならないと考えていると述べられた。

さらに、氏は、参会者の理解を深めるために、人権尊重の教育、健康・安全の教育、教育の内容・方法の改善、生活指導・進路指導の充実という、東京都の四つの教育指針を示され、人権尊重においては、オイル・ショック前には全校でわずか6～8人程度であった生活保護世帯の生徒が、いまや100人を超えるという状況のなかで、子供たちの間に差別や偏見の感情が発生しないように配慮していること、健康・安全においては、毎日朝6時から、そして土曜・日曜の全日校庭開放、あるいは学校自体が公害源にならないように注意をしていること、教育の内容や方法においては、普通学級に入ってくる遅進児や心身に障害をもつ子供たちの増加していくなかで、校内における教育相談、教育機器の開発や活用、学習指導法の研究などによって、落ちこぼし・落ちこぼれない「わかる授業」をおこなうように工夫していること、そして、生徒の指導においては、登校拒否や反社会的行動などを絶滅すべく綿密な教育相談をおこなったり、環七喘息や肥満の子供たちを南伊豆にある養護学園に送ったりしていることなどを具体的に紹介された。

また、北原氏は、家庭における人間性の回復を考えるには、家庭の機能的役割と人間性に焦点をあて、家庭の構成メンバーである家族が、また、社会の部分集団としての家族としても、どのような形で外とのつながり、社会との適応をもちながら機能し、人間性をつくりあげていくものか、また、人格を成長させていくものなのか、または喪失されていくものか、回復されていくものなのか、そして家庭という場や状況における人間関係などについても広く思いをめぐらさなくてはならないと、まず述べられた。

そしてさらに、家庭における人間性の回復という課題は、第一に現在の家庭が人間性を失わせてしまうため、第二に現代社会が人間性を疎外するために家庭がせめてもの憩いの場となって、社会で失われている人間性を回復しようとするため、第三に家庭を人間が個性を活かす場としてとらえ、それぞれの才能を涸渇させないような新しい家庭のあり方をクローズ・アップさせていくため、模索されるものと、さまざまに考えられる。また、特に回復という言葉で、失われたものを見出すという風に考えると、つきつめていけば人間の本質にまで立ち至り、とても難かしい問題となってしまうと、かなり課題

について、つっこんで分析された。

このような見解をふまえて、氏は、家庭を社会の縮図としてとらえ、家庭のなかで人間性を発揮するにはどうしたらよいか、新しい家庭のあり方として個性を伸ばせる家庭をつくるにはどうしたらよいかということが問題意識として出てくると述べられ、それには、家庭の機能的役割、家庭を共同社会として考えたとき、人間関係・相互補完・相互作用・対話・コミュニケーションなど、具体的な行為する人間の生活集団としての家庭が問題になる。そして、共同生活のなかでの人間性は、相互理解であり、寛容であり、妥協であり、譲歩であり、思いやりであり、忍耐であり、愛情であって、言葉による相互交流、行為による相互交流など、具体的に行為というものが家族のなかで重要なファクターを占めてくると指摘された。

そして、家裁の調停事例を見ると、ほとんどの申立てが複合された要因により、しかも日常生活の積み重ねのなかで、親子・夫婦の人間関係が次第に悪化していくこと、また、個人のレベルにおいて、精神的離乳ができていない、自己愛傾向が強い、家族の中での話し合いがなされていないこと、また集団として考えられることは、親とのつながりが強く、夫婦間の話し合いよりも親子の力関係で問題が処理されようとし、家族の内構造の変化が、社会の価値体系の変化を反映して、外構造の変化に伴って生じてくるとなどを分析された。

おわりに、氏は、調停における人間性にもふれ、外国での自己実現・自己発見の方法としてテレ・トレーニング、TA・ゲシュタルト・セラピー、イクスペリメンタル・サイコドラマ、椅子技法などを紹介されたうえで、家庭での人間性の回復は、社会のしくみのなかで、社会からバック・アップされながら、その人間性の強化・再生がはかられなければならない。すなわち、他の社会生活での人間性の回復と密接な関連をもっているのだと結ばれた。

最後に、石津氏は、人間性回復とは人間らしさをとり戻すということであろう。そしてその方法として、連帯と自己実現とが考えられるが、連帯の基本的な考え方は人間はひとりでは生きていけないという事実である。また、連帯の感情は、人間愛であり、思いやりの心であり、他人のために喜び他人のために悲しむという共感であるとまず述べられた。

そして、クール・ファイブの歌う「東京砂漠」の一節“ひとは、やさしさを、どこにすててきたの”を引用され、優しさを否定して生きているのが今日の都会人の姿であると指摘された。本来、人間のホントの望みは、と

もにたすけ合い、仲よく勉強し、仲よく働いて、明るく楽しい社会をつくっていくことであろう。また、潜在能力を発揮して自己を実現していくことであろう。ところが、そのようなことは理想であり、空想であると人はいう。しかし、これを実現すべく、心理学者、ならびに心理学に関心のある人は努力していかなければならないと説かれた。

さらに、氏は、ご自分が住まわれている東村山市において実践されている地域活動を紹介され、そのなかでえられた経験を通して、グループで考え、知恵を出しあって、仲よくやっていけばなんでもできることを知ったと述べられた。すなわち、昭和51年の夏から、毎月1回、市民センターの一室を中心に展開されてきたこの活動は、若者に勇気を与え、老人に生きるよろこびをえさせ、悩む者に力を、行き詰った者に希望をもたせてきたが、その事例を具体的に説明されたのである。そしておわりに、氏は、従来の心理学が事実を説明することのみ腐心してきたが、これからの心理学は可能性を求めていくべきであり、いままでの応用心理学は競争のための生活技術の開発のみをめざしたが、これからの応用心理学は共存のための——人間味豊かな、住みよい社会をつくる——生活技術を創造していくものでなくてはならないといつて結ばれた。

その後さらに、4人の先生方に5～10分程度で、補足発言をお願いしたが、久米氏は、「僕は僕、君は君、されど仲よく、仲よきことは美しきかな」という言葉をひかれ、自分を知る自我の自覚、他者の理解、そして相互理解による相互信頼へと発展していかなくてはならない。自己をみつめ自己をよく知った人は、他人をみても他人のいいところが見えてくると述べられ、先程は個人に重点を置いて話したが、人間は集団のなか、組織のなかでどう生きるかを当然問題にしていかなければならないといわれた。そしてまた、他者との連帯ということも、知的・論理的に説教調のものが多いが、日本人に向く体験学習的なもの——気づきを与える——の開発が強く望まれること、また、集団をつくる一人一人が生かされて生きていると感ずることが最も大切なことだと思ふと付け加えられた。

つぎに、宇多氏は、今日の学校にはいろいろな職種の人たちが勤務しており、教師も72%が女性で(宇多氏の学校では)、思想的なくいちがいから教育観にズレも生じている。しかし、一つの学校として、生きがいをもって子供たちに奉仕していかなければ、それぞれの人の使命は達成できないから、校長としては「他人に喜びを与える時をもとう」という一貫した旗印をかかげ、教育活

動の先頭に立っていると述べられ、具体的に、挨拶や、靴の下駄箱からの出し入れ、傘の置き方、給食における後方付けなど、日常の細かい躰けのなかにそれを生かしていると報告された。またかつて、全校写真会で外に出た時、6年生と1年生、5年生と2年生というように、上級生と下級生が互いに手をつないで歩かせたところ、帰ってきてからの子供の詩のなかに、「お姉ちゃんの手はとてもあたたかかった、とても優しかった」というのがあった。年上の人が年下の人をいろいろといたわり、面倒をみるために体を動かすようにさせている。また、動物や鳥などを飼育させ、それを通じて優しい、いたわりの心を育てている。その他、実際の教育活動のなかで展開された、いろいろな事例を紹介され、おわりに、いのちを大切に教育、耐えることを教える厳格な教育の必要性をも説かれた。

そして、北原氏は、知恵遅れの子供たちを動物園につれていった折、そのうちの一人が転んだが、他の子供たちがいたわっている姿を見て、状況における人間関係の進歩が、人間性の回復につながることを教えられたと付言された。

また、石津氏は、人間性回復の生活技術は、広く実践者と研究者の協働が必要であるが、心理学においても、臨床、産業、教育など各部門の共同研究が大切だと思う。従って、応用心理学会人間性回復部会に、一人でも多くご参加いただきたいと訴えられた。

その後、司会者から簡単なとりまとめをさせていただき、フロアの皆様からのご意見・ご質問などをいただいた。その主要なものとして、まず児玉省氏は、第一に、人間性とは何か、もう少し概念を確立する必要があるのではなかろうか。自分は、人間性の回復とは、異質的なものの存在を認める寛容性をもつことだと思うのだが、今後検討の課題だと思うと述べられた。また、北原氏という、人間性の回復を心理技術に頼ること、石津氏という、サークル的な実験活動、いずれも結構だが、もっと基本的に、理論的にやっていった方がよいのではないか。それから、宇多氏のいう、さまざまな試みも現代の子供をみるとそうせざるをえないと思うが、子供には教えずぎてはいけないと思うと批評された。各先生方お一人お一人がこれにお答えになったあと、板倉善高氏が立たれ、人間性という言葉は抽象的で幅が広い。企業では適性を利用することによって人間性が調和し能率があるだろうし、学校では動物を飼うことによって子供の人間性が育つだろう。また、家庭では年齢差、社会では地域差がそれぞれ人間性に大きな影響を与えていくと思うが、そのへんのかみ合わせがたいへん難しいと述べら

れた。また、恩田彰氏は、昔から感性と理性、あるいは知情意などといわれ、そのバランスがとれて発達していくことが問題となってきたが、人間性の回復とは健康な心身を取り戻すということであろう。それは意識と行動の一致、ロジャーズの自己一致の問題につながるもので、宗教がねらうものもそこにあるのであろう。釈迦は、語ることと行うことが一致するのが如来の姿だといっている。また、寛容ということは受容ということでもあるが、それは森田療法のいう「あるがまま」のことであり、仏教でいう如来、すなわち自然にふるまえるほんとの人間——真人——の姿であろう。本来、人間なのだがいつのまにかずれてしまった。それをとり戻すというのが本日の問題の一つなのだろう。それから、可能性の実現という言葉もだが、それは仏性の開発ということでもあり、本来の人間のいのちのはたらきのあらわれる

ことである。それが個性と社会、内と外が一つになって人間が開発されるということではないかと述べられた。それから、塩入円祐氏が立たれ、人間性の回復という、その言葉自身に今の人間性が傷ついている、そこなわれている、病んでいるというイメージがある。たしかに、世界中で最も競争の激しい、人間の疎外された、人間不信のアメリカ社会にもっとも精神病やノイローゼの患者が多いのだと申され、精神医学の世界においても昔は病気の本態を追求していたが、今日では病んでいる人の人間性にアプローチしていくことに努力していると述べられた。その他活発なご意見、ご質問がさらに展開されたが、紙面の都合上、このへんで擱筆させていただく。なお、当然乍ら文責はすべて筆者にあることを付言させていただきます。